詰め込み話

A子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
詰め込み話

【Ｎコード】
Ｎ１９０５Ｍ

【作者名】
Ａ子

【あらすじ】

書きかけて詰まったお話の避難場所。
基本的に長編予備の触りのお話です。
ノークォリティかつノーコンテニュー。
なんでもありのカオスな闇鍋状態です。
完全自己満足につき閲覧にご注意ください。
力がついたら続きを書きたいなぁ。

ＷＯＲＬＤ　ＥＮＤＳ（前書き）

鬼の街の花の別Ｖｅｒ。
男の子が主人公だったらきっとこんな話でした。

WORLD　ENDS

ヒーローになりたかった。
強くて、正しくて、大切な皆を守れる、なんて。
そんなヒーローに、なりたかったんだ。

（なぁんて、）
（実は、まだ、あきらめてなかったりして）
（ね）

「――――ごめん」

覚悟していたような気がする言葉だった。
っていうか正直めっちゃ覚悟してたよ、何日悩んだと思ってんだ。
……覚悟、決めたと思ったんだけどなぁ……。

「……、あー」

目頭が熱い。ちょ、俺なっさけな！

（うわ、マジ勘弁して）

押し出した声が滲んでるのが分かって手の甲で目元を強く抑えて、二回呼吸を繰り返す。赤く染まった静かな教室に、俺のぶるぶる震えている気がする息の音だけが響いた。何も言わないでくれているのが、この期に及んでたまらなく好きだと思った。ちくしょー、嫌いたいのになー。

「……のさ、いっこ、聞いてもいー？」

「うん」

泣きそう、いやいやせめて彼女がいなくなってからだろ。頑張れ俺。

「――――告んの？」

一瞬、息を呑んだ気配がした。

「知っ、てたの？」

「あー、うん」

知ってました、っていうか気付いちゃいました。気付くさそら。いっちゃん近くで見てますからね。

彼女はしばらく黙った。ぐちゃぐちゃんなった頭で俺も自分が何

口走ってんのかに気付いて慌てて手を外し（視線は色々と決壊しそうで合わせられなかった）、我ながら白々しいトーンで笑いながら手を振った。

「ていうか、ごめん。俺関係ないよなー。何聞いちゃっ――――」

「しないよ」

笑ってるような声だった。びっくりするほど可愛い声だった。

「しないよ、告んない」

「あ」

「ぜったい、しない」

「ぁー」

顔を見た。泣くかと思ったけど泣かなかった。

何で笑ってるのかは分からなかった。

何で告らないのかも分からなかった。

「えっと、俺気にするんだったら……」

ちょっと明日明後日とかだったらダメージでかいし立ち直れないけど、せめて一ヶ月くらい待ってくれればなんとか……なんて女々しいこと考えてる俺に彼女は凛々しく言い放った。

「少なくとも卒業までは絶対にしない」

「え」

目を瞬く。彼女はめちゃくちゃ可愛い顔してた。にぃーって。なんかちっちゃい子が顔中で笑うみたいにした彼女の笑い方が俺はめ

ちゃくちゃ好きだった。

「ばっかじゃないの、こっちだって計算してんのよ。あんたと別れてすぐ告ったら、親友大好きのあいつだったら振られるに決まってんじゃん」

「でも卒業って、おま」

俺も彼女も今は高校一年目だ。今は七月。――――卒業まで二年ちょっとある。

冗談かもしれないけど、びびった。だって彼女は結構（俺にも悟れる程度には）感情表現があからさまで、なにより自分の気持ちに素直だ。だから今こうやってこういう話になっているわけであって。

「うっさい、とにかくあたしは卒業するまで告んないの」

強引に話を切り上げた彼女と目が合った。

正確にはもっと前から合ってたんだけど、俺のほうがふと彼女と視線が合ってしまっていることに気付いた、っていうことだけどそれだけで心臓がばくばくとなりだした。

「あんたの方こそもっとなんか、あんでしょ。……死ねとか最悪とか、にどとかおみせんなとか」

「ないよ」

脊髄反射みたいに声が飛び出す。彼女の目を見て胸の奥辺りがいたい。なんか、本当にこういうときに心臓が軋んでいる気がする。

俺は、言葉をもう一回、繰り返した。

「それこそ、絶対、ない」

「……ばっかじゃないの」

ちっちゃい声。聞き取りにくい声に、また軋む感覚。
瞬きしながらいつもみたいな声を意識しておどけて返す。

「ばかっていわないでくださーい」
「ほんと、ばか」

いつも威勢のいい打って響くような答えじゃなくて、弱弱しい声にこっちまでまた泣きそうになる。やめてくれ、俺のが泣きたい。

（せつねー）

上向いて深呼吸。っていうかこんなんしたら泣いてるってモロばれ。俺かっこわりー。

「……泣くなって」
「泣いてない！」

俺の鼻声に、返ってきた声も鼻声だった。
なんなん、俺ら二人して鼻声で、こんな暗い教室で。
笑いたいけど、笑えない。笑えるわけない。

「あたっ、あたしが泣くわけないでしょうが！　なんであんたを振ったあたしが泣くのよそんな卑怯くさいことしないわよなめんなばか、ばかばかばか、ばかじゃないの！」

いつもヒステリー起こすときみたいなキンキン声で喚かれたけど、いつもみたいに笑い返せない。
だって、お前、それ明らかに嗚咽じゃん。

「だからさー、泣かないでくださいマジで」

今お前を抱きしめて慰めてやれるほど、俺っていい男じゃないんだ。

でも、泣かれると泣き止んで欲しくなる。

嗚咽が落ち着いた頃、薄暗くなってきた教室で俺は二三度瞬きした。

「もう暗くなったし、帰れって」

「……うん」

「前山さん達は？」

「……先帰った」

「俺、今日は一緒に帰れないからさー、気をつけて帰んなさいね」

「……っうん」

俺はぶるぶる震える息をもう一回、吐き出した。

「じゃ、」

小さく頷いた影を見て、何だか逃げるみたいに教室から飛び出していった背中を見送った俺はずるずるしゃがみ込んで大きく溜め息を吐いた。

（あーあーあー……もうさー、ねぇ）

窓枠の下、壁に頭を押し付けて俺はもう一回溜め息を吐く。呼吸がそれと分かるほど湿っている。小さくしゃがみ込んで、今誰かに見られたら相当間抜けな姿のまま机の影で一人ごちた。

「いってーなーほんと」

自分の耳に潜り込んできたのは、我ながら、笑っちゃうほど半泣きの声だった。

田中朝幸（たなかともゆき）、十六歳。

付き合って二ヶ月目にして失恋しました。

WORLD　ENDS（後書き）

男の子の異世界トリップだったらきっとこんな話が好きなんだなぁと思います。

多分、この後に色々あって異世界にトリップするんじゃないかな。

理不尽と現実と自分と理想にぐちゃぐちゃに踏み躙られて傷ついても、ちくしょーって泣いて怒って喚いて絶望しても、図太くしたたかに「夢みたいできれいごとな希望」を離さない子のお話が書きたかった。女の子とは種類が違う男の子の強さを書きたかった。

力不足で挫折です。精進します。

スィサイド・ゲノム（前書き）

現代ファンタジィ予定物。
至上命題と同じ時期に構想していた。

スィサイド・ゲノム

保健所で殺されてしまう犬を見た人々と同じように、
今から死に逝く貴方達に一瞬の哀れみと同情と好奇心を！

（どうかお気を悪くなさらないで、）
（――――これが私達のお仕事なのです）

――――雑踏にあたし一人、簡単に紛れ込んで消えられる。

あたしは携帯電話を片手に薄汚れたモザイクに背中を預けている。約束の時間まであと十五分。周囲にはそれらしい格好をした人は未だ見えない。休日の駅構内は忙しそうに辺りを行き交う人々ばかりで、こんな場所に居続けるあたしが妙に浮いているように感じる。目の前を通り過ぎた腕を組んで歩くカップルに見られた気がして顔

を伏せた。惨めな気がした。

（……どうしよう、）

落ち着かない気分で携帯を弄る。メールボックスを開けて閉じて新規のメールを開いて文字を打ちかけて消す。ここに着いてからたった十分でもう同じ動作を三十回は繰り返している。完全に無用の長物と貸している携帯を閉じてブレザーのポケットに放り込んだ。途端に手持ち無沙汰。

そわそわと身なりの確認。変な事をしていると思った。でも不安になった。大丈夫だろうか。待ち合わせの人には分かって貰えるだろうか、それとも気付かれないでいられるだろうか。この前、ネットで手に入れたグレーとピンクのチェックのスカートと、揃いのグレーのブレザー、右胸に着いた金糸の豪華な校章、ピンクのリボン。

馬鹿げた妄想を巡らせる。先ほどから斜め前にある交番に立つ警察官の視線が気になって仕方がないのだ。違う制服を着ていることを見抜かれて、尋問されないだろうか。それともこれから先に起こることを見透かされやしないだろうか。そんなはずもないのに、後ろ暗い気持ちに落ち着かない。ここを指定したのは自分だというのに、一体あたしはどうしてしまったのだろう。

『ＪＲのＣ線Ｔ駅でどうでしょうか』
『南口側改札のモザイク前でいいですか』
『では、４時半にその前で』
『制服で行きます。グレーの制服です』
『Ｔ女の制服です。ブレザー』
『はい、ピンクとグレーのスカートです』

頭に字体の形すら焼き付いている文章を思い返して唇を噛む。この期に及んであたしは、卑怯だ。
交番の前を選んだのは、相手が変な奴だったときはすぐに逃げられるように。わざわざ違う制服を買ったのは学校がばれないようにするため。

この期に及んで、あたしは保身のことしか考えていない。

ふと、周囲が一層騒がしくなり顔を上げる。電車が到着したのか改札からどっと人が押し出されてきた。日曜日の午後だというのに、制服姿の人たちは沢山いて少しだけ安心する。壁に掛かっていた時計を見た。午後、四時十九分。待ち合わせまで、あと十一分。

「――――ネラさんですか？」

びくり、体が震えた。

「え、」
「初めまして、ですね」

顔を反射的に上げたあたしは、阿呆みたいに口をあける。
いつの間にか目の前に立っていたその人が、ふわりと笑って頭を下げる。

『目印はどうしましょうか』
『では白い日傘を持っていきます』
『それと紺色のワンピースで』

紺色のワンピースに白いカーディガン。
手にはたたんだ白い日傘。

右側で緩く結わえた綺麗なミルクブラウンの長い髪。
白い肌に、繊細そうな整った穏やかな面立ち。
鮮やかなピンク色の唇が緩やかにつりあがった。
「私、スィサイドゲノムの管理人、佐藤と申します」
カチリ、
時計の針が動く音が妙に鮮明に聞こえた。

スィサイド・ゲノム（後書き）

真面目に書こうと思って潰れた単純に言えば「死生観」テーマ。とてもぐちゃぐちゃした文章になっています、申し訳ない。

恥ずかしい内面をさらすのであれば、どこかで見た死の天秤という言葉に自分なりの解答をつけようと試行錯誤したもの。天秤の片方に置いた命ともう片方に置いた命は「如何なる命であっても」平衡するかと考えて書けなくなりました。

文章以前に思考と知識不足で挫折しました。精進します。

飼い猫の王様（前書き）

カッとび恋愛もどき予定物。
自分の好きテーマを詰め込みました。

飼い猫の王様

気紛れで、怠け者で、人でなし。
誰よりも強くて誰よりも賢くて。
何でも出来て何でも知っている。
誰よりも綺麗で格好いい。
（だいすきな、王様）

ある、雲ひとつない空が印象的な青い日の午後の話だ。
田中有（たなかゆう）は飴三つに釣られて現在学校中をさ迷っている。口の中にはイチゴの飴、右手には舐めている飴に付いている棒を摘み、左手には包み紙に包まれたブドウとオレンジの飴を棒を握り締めてぶん

ぶんと元気よく振られる。

授業中の静かな廊下を練り歩く。廊下の幅を左右に贅沢にふらりふらり。静かな誰かの何かの声と、無音と、どこか遠くの教室から聞こえるどっと弾ける小さな笑声。強烈な透明感のある青さを覗かせた廊下の窓からは差し込む柔らかな日差しと温かい風がスカート裾に戯れている。

何をしているのかといわれれば、授業を抜け出して現在、有はお使いの真っ最中である。

調子の外れた機嫌のいい細い鼻歌が廊下に響く。ハミングする本人の顔はあくまでも無表情だ。綺麗な漆黒のおかっぱが首を傾げるたびにさらさら揺れる。

『――――お願い、田中さん』

脳裏を過ぎるのは、泣き腫らした目と蒼白な顔の綺麗な新任教師。清楚な美しさと穏やかな気性を持つ彼女は男子生徒の間で高い人気を誇っていたはずだ。有は鼻歌交じりに小さく真っ赤な唇を吊り上げた。無感情な猫目がゆるりと細められる。

「かわいそう」

抑揚のない高い声は子どものように無邪気だった。制服に包まれた細いからだがくるりと回る。細く華奢な足はステップを踏むように、白い首がこてりこてりと左右に揺れた。鼻歌が途切れて、笑い声。ふわりと短いスカートが浮かぶ。飴を取り出して独白する声は、教室からもれ聞こえる教師の講釈に掻き消えた。

「みおちゃんせんせは、かわいそう」

飴を赤い舌先で一舐め、口の中に戻して無表情になった有はふらりふらりと歩き出す。

託された伝言を反芻する。託された紙切れはスカートのポケットの中で歩みにあわせてかさりと抗議の声を上げる程度だ。

甘い甘い赤い飴。イチゴの味なんてしない、ビー玉のような透明な赤を赤い舌で嘗め回す。

思い返されるのは震える声だ。漢文を読むときの、淀みなく高く澄んだ、硝子細工のような綺麗な声が有は好きだった。だから飴玉三つでお使いを頼まれた。廊下を進みながら有は思う。

（ざんねんだなぁ）

廊下の突き当たりの陰になった空間。

そこには普段教師が厳しく言いつける立ち入り禁止の屋上へと続く薄暗い踊り場がある。

薄暗いそこに躊躇なく潜り込み、有は棒の先にこびりついた飴をかりりと噛み砕いた。赤い破片が口の中で砕ける感触が面白い。かり、かりと破片を粉砕しながら有は階段に足を掛けた。

――――目指すのは王様のいるところ。

王様は変態だ。

青い青い、空の下で響き渡るのは水音と吐息とあられもない嬌声。せわしい気配に有は首を傾げた。――――こんないい天気なのだから、昼寝をしながら日向ぼっこをすればいいのに。なんでいつもいつも、晴れた空の下でぐうたらな王様がおきているのか。

重い扉を足で押し開け、その隙からするりと入り込んだ有は銜えていた飴の棒をポケットから出した包み紙で適当に包んでからポケットに押し込んだ。その間に一際高い嬌声が弾けて、一拍。

聞きなれた、笑みを含んだ王様の声が青い空に響く。

「――――どうしたの、りぃちゃん」

給水等の影から、着崩した制服姿の王様がゆるい笑顔で顔を出す。ふらりと、あっという間に有に近づき体を抱き上げた。有は無表情で抱き上げられるまま、鼻を動かした。王様の香水の匂いと、甘ったるい香水の匂いと、変なにおいがした。高い高いで持ち上げられた有は、下でゆるやかに微笑む王様の整った顔立ちを眺めた。

１５０センチもない有を、１８９もある王様はいつも軽々と持ち

上げる。だから有は王様の青い目が近くで見られるこの瞬間が好きだ。

黒い髪に、今日の空のような青い目をした王様は学校の誰よりも大きいからだと、テレビの中の人よりも綺麗な顔を持っている。有の顔を見て「ん？」と首を傾げた王様は、ふと何かに気付いたように先ほどの有よろしく鼻をそよがせ顔を有の口元に近づけ……眉を顰める。

「りぃちゃん、あまい匂いがする。なにたべたの」

「あめ」

左手の二つの飴を眼前に翳して見せれば、穏やかだった顔が厳しくなる。

「俺、今日のおやつまだりぃちゃんにあげてないよね？」

王様の厳しい顔に、有は変わらない表情で首肯した。

「ん」

「……誰からもらったの。駄目っていつも言ってるでしょ」

更に不機嫌そうに眉を上げた王様は無造作に口の中に指を突っ込んでこじ開ける。有は逆らわず口を開け指が力を抜いたのを見て……勢いよく閉じた。

「いった！」

悲鳴を上げて王様は唾液が伝った指を引き抜いた。白く綺麗に並んだ有の歯が噛み足りないといわんばかりにがちがち鳴る。有は二、

三度歯を鳴らして手を振る王様に重々しく告げた。

「ゆうのあめ」

「あのねぇ。りいちゃん、舐め終わっちゃった飴は横取りできないの」

「ゆうのあめはみおちゃん先生に貰ったの」

「ん？」

王様の台詞を聞き流して告げた有に自身も大して気分を害した様子もなく、王様はゆるい表情で首を傾げた。ゆうも真似て首を傾げる。王様は少々目を眇め、有の額に額を重ねて甘ったるい声で続ける。

「みおちゃん先生？　誰が、りいちゃんに何って？」

「ゆうのおつかい。みおちゃん先生がくれた」

胸を張ってみる有にしかし、王様は不可解そうな顔をした。

飼い猫の王様（後書き）

体格差・保護者と被保護者・常識をステップで踏み外すカップルが好き。

それゆえにストーリー性が後回しになった不親切設計なお話でした。

そんな気持ち悪いほどの自分の嗜好を思う存分に書き散らして、気がつけば収拾つかなくなってしまいました。タイトルはひたすら所有格をどっちにつけるか迷った末に曖昧なグレーに落ち着いた、というどうでもいい裏話もあります。

暴走したため二進も三進も進まなくなりました。精進します。

下らない、お話（前書き）

永遠の憧れのテーマが理想。
それでもやっぱり王道が好きです。

下らない、お話

（どうして、）

今更ながらに感じるのは、掌の柄のずっしりとした重み、むせ返るほどの血のにおい。

仲間の叱責する声と、――――。

そして、血で表面をコーティングされた剣の、日の光を反射した眩い光だ。

明日香はぼんやりと目の前に立つ親友を眺める。

これは夢に違いない、そう思いながら体は動かない。

控えめな優しさを滲ませる顔立ち。

綻ぶようなささやかで柔らかい笑み。

強い風に翻る長い髪は明日香と同じ黒。

明日香がかつて着ていた黒いセーラー服と臙脂のスカーフが誰よりも似合う彼女は、ともに学んでいたときのその姿のままで明日香の目の前に立っていた。

現実を訴えるように耳を刺すのは、後ろで支えている仲間の悲鳴じみた声だ。

「アスカ！　何をしているの！」
「アスカ、早く……！」
「……月、子……？」
押し出した声は、自分でもそうと分かるほど震えていた。
掌の柄を握りなおす。分厚くなった掌の皮が柄に張り付いているような錯覚を覚えた。
「なぁに、明日香ちゃん」
おっとりと首をかしげて微笑む月子に明日香はへらりと笑う。
耳障りながちがちとした音は何だろう。
夢見心地で明日香は引きつった顔のまま月子を見つめる。
開いた唇から零れた声は、不自然なほど甲高かった。
「つき、月子、どうして、」
「あ、え、ううんそんなのどうでもいい」
「なにしてるのそんなところ」
「あぶないからねぇつきこ」
「アスカ！」
愛しい人の、仲間の声が、心臓を打つ。
がちがちがちがちがちがちがちがちがちがちがちがち。
全てが、遠い。
「なんで、つきこが、そっちにいるの？」
おっとりと、月子は微笑む。

そして、背後の敵国の男に腰を抱かれるまま、嗤った。

「ばかねぇ、あすかちゃん」

――――決まっているじゃない、そんなの。
がちがちがちがちがちがちがちがちがちがちがち。
だらりと下がった腕の先、剣が地面と小刻みにぶつかる衝撃。

そして月子は。
明日香の友人は、囁くのだ。
甘く甘く、滴る毒を滲ませて。

「私は、この人の参謀」

貴女が否定した見貫の丘の捨て戦も、
貴女を絶望させた南納河の禁術戦も、
貴女が止めようとしているこの計画も、

貴女が否定した思想も、
貴女を絶望させた戦術も、
貴女が止めようとしている世界の形も、
全部、全部、描いたのは。

「考えたのは、全部、私よ」

ねぇ、明日香ちゃん。
風の吹く、瓦礫の王城の前。
残虐非道な敵国の王の、寵姫であり、
彼の王を操っていた、策謀家であり、
友人であった少女は、笑った。

下らない、お話（後書き）

仲の良かった女の子同士が敵と味方に別れるお話。
王道の対決シーンのみを書くというがっかり横道なお話です。

正義とか悪とかは勝つ前には決まってないっていう勝てば官軍なお話を書こうと思って構想を練って大筋決めた段階で、知識が足りないほど壮大なことになって挫折したお話。戦術って勉強しないと分からない。

もっと色々勉強して精進します。

ばけものイオとしんせつなシーナ（前書き）

色々試行錯誤したお話。
結果は言わずもがなです。

ばけものイオとしんせつなシーナ

イオはばけものだ。
化け物イオはこの世の果ての森の中の、更に奥ある石の室で生きている。

「やあ。可愛い俺のばけものイオ、元気かい」

親切なシーナは優しい顔でにっこりと囁いた。
イオはことりと首をかしげる。啜っていた蜜が唇の端からたらりと垂れた。
齧っていたものを床に捨てて、イオは前掛けにべたつく手で触る。握る。
ひらひらしたのがくっついたイオの前掛けはすでに蜜でどろどろに汚れている。親切なシーナが毎日持ってくる真っ白い前掛けはイオの首から膝までを覆っているのでイオの体がべとべとになることはない。
親切なシーナはイオの顔を前掛けの白い部分で前掛けの布のように柔らかく押さえる。イオはされるがまま、ただ口の中に残っていた蜜を飲み込んだ。ふわふわ笑う親切なアラウを見る。
蜜を拭ったシーナはイオの首の後ろに手をやるとどろどろの前掛けをするりと外し、一丸めして室の外に放り投げた。
シーナの後ろにくっついていたシーナではないものが差し出した新しい前掛けが代わりにイオの首に巻きつく。ふわふわひらひらのそれを触り続けるシーナはいつの間にかイオの寝床にイオを抱いて転がっていた。

「イオ、」

シーナはふわふわ笑いながらイオを抱きしめる。きつく強く抱きしめる。そして時折、イオを齧って舐める。イオはただぼんやりと親切なシーナを眺めた。親切なシーナはとても親切だった。

例えば、イオの蜜は、シーナが与えたものだ。

例えば、イオの前掛けは、シーナが与えたものだ。

例えば、イオの世界についての知識は、シーナが与えたものだ。

例えば、イオのイオについての知識は、シーナが与えたものだ。

「イオ、イオ」

シーナはイオを抱きしめ齧り舐める。時折、汚れてもいない前掛けを破きもする。そしてイオにくっついて笑いながら抱きしめる。今日のシーナは喉の奥でくつくつ音を立てていた。

今日のシーナはよく喋った。

例えば森の外にでる悪魔の人攫いの新しい話。例えば森の外の馬鹿な男がお姫様に逃げられた話の続き。例えば宝物を盗んだ大泥棒とそれを追い掛け回す人々の話の続き。

「ばけもののイオ、俺のばけもの」

イオはばけものだ。シーナはイオに親切だった。

イオは右目と左耳がない。右足と左足もないけれど、変わりに親切なシーナが用意してくれた魔法の靴をつけている。シーナのナカマに追い出されてここにさまよいこんできたみにくいばけもののイオを石の室に隠してくれたのは親切なシーナだった。

親切なシーナはイオに親切だ。みにくいイオを抱きしめたのはきっとシーナが初めてだ。

イオは今日も暴れる胸を押さえながら、いつの間にかうつらうつらとシーナの腕の中で眠ってしまう。

ばけものイオとしんせつなシーナ（後書き）

結果はいわずもがなです。大失敗。
文体を変えようとしてみたり文章を変えようとしてみたり。
そんな痕跡も窺えないしょんぼりとしたクォリティ。

タイトルがぱっと浮かんでがりがり書いて書いて……挫折しました。話が進まない、というよりたてた大筋が話になっていないことに書いてから気付きました。ちなみにこれは異世界トリップではなく現代ものです。分からない。

もう少し、計画性というものを勉強します。精進します。

言葉遊び（前書き）

よく行っている言葉遊びです。
1．完全自由型自己満足文
2．理性より感覚優先
3．物語というよりポエム
の以上3点にご注意ください。

言葉遊び

【００　貪る】

０１　食べる

口に頬張り唾液を湧かせ噛み潰して嚥下する。
悲しみと食欲は直結している。
いつでも悲しいから、いつでも食べていたいのだ。
ケーキにカレー、ソーダ水、パンにレタスに刺身にお米。
美味しければいいけれど、美味しくなくても別にいい。
手を口に口を動かし喉を開ける。
満たされない、満たされたい。
欲しいものの代替に腹を満たす。
甘やかされたい。刺激がほしい。
食べる食べ食べる食べる。
いくら食べても、食欲は満ちない。
欲しがりのまあるい腹を膨らませ今日も頬張る。

０２　正気

生きるためだったのですと兵士は呟いた。

真っ先に尽きたのは弾薬でした。
私は誰にも見つからなかった。
次に尽きたのは携帯食料です。
私は誰にも見つからなかった。
最後に水も尽きました。
私は誰にも見つからなかった。
ええ、それが全てです。
私の横には物言わぬ輩が虫を湧かせていました。
私は誰にも見つからなかった。
見つかった時には、私は一人だけでした。

03　許し

無限に湧きいずるものだから、史郎はそれを好んだ。
有限を恐れていた史郎にとって、無限は許しだ。
見えるものには期限がある、見えぬものにも期限がある。
意味の分からぬものを、正体不明なものを史郎は愛した。
今日も史郎は妄想にふける。
今日も妄想は史郎をゆるす。

04　空気

プールサイドの片付けは簡易に見えて七面倒だ。塩素でぼろぼろになった数多くのプールの彩りを抱えて鈴木は溜息をついた。えっちらおっちら倉庫に荷を置いて再び戻る。単純作業は思考を彼方に蹴り飛ばす。同じ掃除当番の佐藤と清水は掃除そっちのけで無邪気

に遊んでいた。それを横目に、置かれた発泡スチロールめいた板の積み重ねを抱えた瞬間だった。あ、という素っ頓狂な声とともに世界がひっくり返る。視界に入った鮮烈な青い空と発光する白い太陽に透明な膜がかかる。世界が不可思議な重みをもって鈴木にまとわりついた。制服が体に絡みつく。衝撃の余り開いた口から大きな泡と小さな泡が吐き出され、空気が消えた。奇妙な味のする水を飲んだ。言いようもない苦しさだった。けれども何故か体は動かず、目は開いたままゆらゆらゆれる晴れた空を映す。次の瞬間、世界が揺れて影が鈴木を引き上げる。ざぶんと音がして、光。目が染みて一瞬閉じた目を開けば、驚くほどの鮮やかな世界が鈴木を照らした。まるで極彩色だ。「すずきー！」「すずきごめん、大丈夫か！」塩素の匂いの生々しさが鼻を突き、蝉時雨が鼓膜を震わせる。乱暴に引きずられ背中がプールサイドの段差にあたった衝撃で口から水が吐き出された。急に空気の存在を意識して息苦しさを知った。熱いコンクリートの上で身をかがめぜいぜいと水を吐きながら鈴木は、涙をこぼす。「うわー、すず、すずきー！」「せんせー、すずきがー！」「すずき、しぬなー！」佐藤と清水の高校生男児にあるまじき涙声を聞き菜ながら鮮やかな世界に生まれた意味を鈴木は初めて知った。

０５　愛

何故？

貴方といる感情に時間が不足しているから。

言葉遊び（後書き）

このお遊び、書くときの自己ルールは、
1．大きなテーマに沿って書く
2．小さなテーマで５つ以上書く
3．合わせて１０００字程度にまとめる
の３つくらいでした。

なるべく広い発想をしたくて作ったルールでしたがあまり生かせていません。今後は３話以上にストーリー性を盛り込むのが目標です。

精進いたします。

アイテイギ（前書き）

何も始まっていないお話。
基本的に実体が定まっていません。

アイテイギ

「君たちにとっての”愛”とは何か、定義してきなさい」

授業が始まり五分。

出席を取り終え、数拍の沈黙の後に発せられた倫理の教師の言葉に教室がざわめく。

初老の気難しげな教師は眼鏡の奥の一瞥だけで教室を黙らせた。

「私は君たちを教えるにあたって君たちの程度が如何ほどなのか知りたい。知識・論理性・文章能力、はたまた常識から課題の提出状態。二十年教えてきたが、君たちを知るには課題を出すのが一番手早いというのが今までで得た私の結論だ」

この名門進学校でも名物教師の一人に挙げられている男の言葉には奇妙な迫力がある。

進学率と合格率、そして合格先がものをいうこの学校においてただの履修単位消化教科と揶揄される倫理。それでもこの教師の授業は代々生徒から熱烈な支持をもって受け入れられてきた。「凄い授業」と受け入れられる一方で、「とてつもなく難しい」と言わしめられ、同時に「覚悟して受けろ」と忠告をされる。

一般に、いわゆる暗記科目といわれる倫理だがこの学校における倫理の評定平均は１０段階で５．６。現国が８．９、数?が７．３、ライティングが７．５とされるこの学校において比べるとその評定平均は非常に低い。

そのすべての原因である教師は、無表情のまま持ってきていた紙束を無造作に分け、全席の生徒に手渡す。慣れたもので生徒たちは無言で渡されるがままそのプリントを回すが、その紙面に視線を落とした教室前方から疑問の囁きが零れだす。

真っ白いその紙には無機質な印刷で５０行近い罫線が引かれている。目を引くのは、紙上部の四角く囲まれた氏名欄と学年クラス出席番号欄と、一際２行ほどはありそうな大きな空白の枠線だった。

教師は全員に用紙が回り終える前に黒板に向き直るとチョークを手にし書き出していく。

「課題は先程も申し上げたが「君たちにとっての愛の定義」に関するレポートだ。上部空欄には要点を一言で説明したものを記入しなさい。氏名等は記入されなかった場合未提出とみなす。文献は何を参考にしてもかまわない。ただし、参考にした文献全てを末尾に明記するように。提出用紙は今配布したもののみ受け付ける。ただしこの提出用紙をコピーしたものは可だ。提出は来週のこの時間の出席確認後１５分間」

チョークが黒板をたたく音が静かな教室に響く。振り向きもしない要件のみの発言をさらに箇条書きに黒板に連ね終わった後、ようやく教師は厳めしく振り返った。そして相変わらず温度のない視線で眼鏡の奥から教室中を睥睨するとおまけのような口調で問いかけた。

「何か、質問は？」

レポートを書くことだけならばこの学校の生徒はそこらの大学生

よりも上手くやる。論文・作文、起承転結や序論本論結論は1学年時から徹底してたたきこまれるからだ。しかし、今回は少々勝手が悪い。

倫理の前原の５０行作文レポート。

代々、生徒が苦しめられる課題は陰でそう恐れられている。生半可な論述では評価は最低。かといって完璧に思われたレポートも「文章に熱がない」と切り捨てられることもあるといわれている。課題で４つ以上Ａをとった人間は噂によると歴代で１０人いない、評定平均５割の諸元。

「字数は？」

どこかからの短い問いかけに教師はにこりともしない。

「君の論理性に任せられる。３行で完全な論述になっていればそれでよい、足りなければ所定用紙をコピーして１００枚書いて証明してもいい」

「記述はペンでも？」

「君は書くものによって論理が変化するのか。馬鹿馬鹿しいが、君が最も美しい証明ができるもので記入すればよろしい」

「書いた内容は発表されますか？」

「その質問は非常に興味深い。必ずと言っていいが各年各組でその質問が出る。理由を尋ねたいところだが、まあいい。――発表はしない。理由は二つ。一つはどうやら中には文章を他者に読まれることに苦痛を感じるものもいるらしいため。以前、実験し公表しないとした課題の方がよい内容になったことがあった事実に基づいている。もう一つは書いた内容はそのまま君たちの成績に直結するため。つまり私はこれを試験と同様に考えている。試験結果は個人情報にあたる。個人情報は原則公開しない」

「宗派は成績に影響しますか」
「その質問も面白い。答えると、私は信仰の自由にのっとって現在まで教鞭をとってきた。宗派によって成績をつけた記憶はない。基本的に君たちの知性を試しているつもりだ。ただし、誰かが信ずる宗派の概念に理論性が見つけられない場合もあるとだけ言っておこう。他に質問はないか？　……結構」

教師は頷くとおもむろに出席簿を取り上げて、教室中を眺めた。
固まったようなその口角が、おもむろに歪む。

「テーマは毎年同じものを使用していることを知っているものも多かろう。君たちの先輩、その先達たち、今まで数えきれないほどの回答を見てきた」

教師は、笑みを浮かべて静かに囁いた。

「私は、いつだって君たちの若き感性、虚飾のない文章を期待している」

静まり返った教室で、おもむろに表情を戻した教師は再び熱のない目で言い置いた。

「では本日の授業はここまで。課題そのものに対する質問、課題に必要な知識を得る質問は常時受け付ける。社会科室かもしくは、私に振り当てられた学校のアドレスにメールをしなさい。できる限りの誠意で対応しよう。……それでは、来週」

教師は壁に掛けられた時計を一瞥する。授業開始のチャイムが鳴ってから二十分。無音で出ていく教師の背後で教室が弾けたようにざわめきだした。

アイテイギ（後書き）

構想上はこの後、少なくともクラスメイト４１人分のレポートを書くつもりでした。

何を考えていたのか、それとも何も考えていなかったのか。恐らく、後者です。

テーマは哲学の復習。哲学関係書を読み漁りましたが考えがまとまらずプロローグだけ書いてお蔵入りとなりました。そもそもそんな哲学素人の稚拙な４１枚のレポート、面白くもなんともないということに気付けたのは幸いでした。

精進します。

マイスイートハート（前書き）

テーマが二転三転した結果、途中放棄したお話。
短編の一つとつながっている設定です。ご了承ください。

マイスイートハート

「ねぇ、ダァリン。愛しているわ」

最近、よく何気なく過ぎてきた時間を考える。

俺の種馬は俺を含めた俺の生んだ女に興味がなかった。俺を産んだ女は種馬にも俺にも興味がなかった。自分の生き方に必要な手形を求めた男と、自分の美しさを永遠に愛し続けた女はいかにも似合いの夫婦だった。

俺を育てたのは男が雇った家政婦だった。男を慕い女を嫉んだ家政婦は最終的に俺に「愛情を注いだ」。家政婦は舐めるように俺を保護し、時には厳しく俺をしつけた。「間違っていた、だけれど私は彼を実の子として愛した。全ては神様の手違いだった」後に俺を誘拐し捕まった女はそう泣いたらしい。全身に爪でみみずばれをこしらえていた俺は病院のベットの中、テレビを眺めてその言葉を聞いていた。

その後も無関心な両親に代わって叔父夫婦が俺を引き取った。聖職者だった叔父は俺に生まれてきた意味を説いた。俺は神様に愛されて生まれた子だといった。神様に望まれ生まれてきたのだいった。叔父さんと一緒、兄弟なのだと微笑んだ。叔父は小学校にあがるころ、強姦罪で捕まった。叔母は冷えた口調で呟いた。「あんたを助

けてくれない神様でも拝んでなさいよ」

再び両親の元で暮らし始めた俺は極めて平穏に暮らしていた。必要な金と環境は与えられていたから特に何かに困ることもなかった。

ただ、何事にもやる気のない俺を見て中学三年時の担任は時折、眉をひそめて呟いた。

「――――お前がいつか、」

何だというのだろう。思わせぶりな担任はいつも最後の一言を濁した。叔父のような瞳で、家政婦のような口調で担任は何とも言えない顔をしていた。

いつか、それが何だ。いつかなんて言葉を百回繰り返しても現実は極めて平静に日常を繰り返す。繰り返した日常の果てをいつかだというならば、その言葉にどれ程の価値があるのだろう。

俺は平穏な日常を愛している。そしてこうして生きている限り平穏は続くに違いない。人生の前半にドラマチックな出来事を体験し尽くしたから、もうさらさらあんな出来事はないだろう。

そう思っていたんだけど――――。

「ねぇ、マイダァリン」

「ダァリンは今日は何に怖がっているの」

教室の真ん中、ＨＲという名の自習時間に堂々と乗り込んでいる後輩はくすりと笑った。ふわふわの黒髪、華奢な体に小さな顔に大きな目。容姿が一際整っている後輩こと俺の恋人は今日も甘い声と細い指先で俺の頬を突く。授業はどうしたんだ。

「や、別に……っていうか……ダァリンって本当にやめていただけませんか」

「もう！またごまかすのね。いいわ当てちゃうから」

「話を聞いてくださいお願いします」

周囲の視線が痛い。男の理想のような顔立ちをしている少女の恋人に対する嫉妬的なあれこれな視線かとおもいきやそれは三割。七割は同情だ。多分。たまに「がんばれ」とか言われるし。友達いないからよくわからないけど。

「分かりました！　ダァリンはどうせまたダァリンの面白い過去を愚にもつかずあれこれ考える無駄な行為を繰り返しているのね！」

「なにこの人本当に怖い……」

言ってること酷いけどまさにそんなようなことを考えていた俺は本気で戦いた。なんか頭おかしいと思われそうな色々な可能性を一瞬本気で口にしそうになった。

因みに彼女は俺の過去を知っている風に言った。実際は風ではなく本当に知っている。怖い。結構前に金と人脈にものを言わせて調べさせたって自己申告された。怖い。挙げ句、俺ですらしらないような事実まで載ったファイリングされた俺・資料を渡された。怖い。

そもそも俺の父親もなかなか金と権力で物言わせるタイプであるが、この恋人はそれを爪先で突いて吹っ飛ばす程度の家の跡取りらしい。風の噂に聞くところによると、小さい頃、何かに腹を立てたときは当時の与野党党首数名に土下座させたらしい。なんでそんな事態になるんだ。土下座なんて生まれてこの方したことはあってもされたことはない。

そんな恋人は、ビビって身を引く俺に更に身を寄せて、っていうか近い近い近い近い！

「———ねぇダァリン、貴方って本当に、お馬鹿さんでゾンビでわがままで口先ばっかりのどうしようもない人よ」

甘い口調で罵ってくる彼女が何を考えているかなんて、考えたくもない。

「それでもね、ダァリン。お腹抱えて笑っちゃうような過去を持ったダァリン。それでも必死になってない脳みそを絞って、持っていない感情を拾って、一生懸命考え続けるような貴方を愛している」

「……そーですか、」

俺は今、告白されているのか罵倒されているのか。

「理解しようと近づこうと足掻く様は誰でもできるものではないと私は思っているの。さも当然のように誰かの意志を自分の暗号に当て嵌めて解読する人間の多いこと！」

「あー……はぁ」

最近、よく何気なく過ぎてきた時間を考える。過ぎてきた時間のなかに置き去りにされてきた言葉を幾度となく繰り返す。

この恋人と出会って意識したことがあるとすればそれは、言葉には力があるということで。

「まぁ、ダァリンの場合、大前提とすべき思考の平衡が経験上察するに狂っているから大抵の条件下では全て無駄なんだけれど。でもそんなに無駄な努力に勤しむダァリンも素敵」

「……ええー」

人の考えていることをなんで彼女はこんなに読んでいるんだ。とか考えながらも近づく唇が頬に触れた。

「怖がりなダァリン。大丈夫よ。貴方が過去に失った時間も経験も感情も取り戻すことはできないけれど、」

これから重ねていけるでしょう？

そう言ってふわりと微笑む彼女を見て、顔を伏せる。

「ダァリン焦らなくてもいいの。貴方が私を愛してくれるまで、いつまでだって待つわ」

柔らかい手の平が柔らかく頭を撫でる。

そして。

「――安心して。私、今まで手に入れられなかったものなんてないわ」
「……それもどうなの……」
スイートハート、なんて馬鹿げた言葉を言う気は更々ないけれど。言葉の力で心臓は今日もまた甘ったるい痛みを訴えるのだ。
そうして今日もまた、俺の平穏な日々はまた一つ遠ざかる。

おばかなダァリン。
私はダァリンのつむじを突きながら小さく笑った。幼少期、歪んだ生活を送っていたダァリンは頭が少しだけおかしい。うーん、これには語弊があるわね。ダァリンの思考回路はかなりおかしい。
ダァリンは自分の両親は自分に興味がないと思っている。ダァリンは家政婦にとって自分は父親の愛と母親への憎悪を発散する玩具だったとおもっている。ダァリンは叔父は綺麗事を言っている犯罪者で叔母は叔父を嘲笑って捨てたと思っている。
でも事実関係にしか興味がない私から見ればまたそれは違った話になるんだけれどまあ、それは野暮ってもので当人たちが一生懸命試行錯誤しているのに手を出すほど暇な人間じゃない。
それにしても。

（一律的な見方しかできない人間ってこうなるんだわ）

耳を赤くしたダァリンに微笑みながら私はそう感心する。

ダァリンは必死に自分の過去を浚っている。今まで無関心に看過してきた出来事を浚ってはそのたびに自分への否定に打ちのめされて無気力になっている。面白い人だ。それでも必死に何度も何度も言葉の意味を考えるダァリンはとんだ被虐趣味でそこがまた可愛いのよね。

――――ダァリンが打ちのめされる世界の見方はそのまま、ダァリンの「自分への絶対的な否定」が根底にある歪んだ世界だ。そこに何を積み上げてもそこにあるのは自分への否定だけ。ダァリンの思考には常に無意識下で絶対的な自分への不信がフィルターかかっている。

自己中心的という言葉がある。一般的に自分のことしか考えない人間に使うような言葉のようだ。一方で似た言葉に自己中心性というものがある。こちらは学術用語で幼児の心理学においてよく知られる特性を指す。

幼児は、自分の見方しか分からない。反対側から見てみても自分の見ている世界と同じ風景があるとおもっている。違う視界が存在していることを知らない。自分の見ている世界がそのまま世界の姿となっているのだ。

普通、当然のように成長していく過程で出会う新しい世界に塗り替えられるはずの特性。けれどもダァリンの心理においては成長が止まってしまっている。

眺めている水槽の裏側から見れば、同じように魚が泳いでいると思いこむ子供の姿はそのまま、ダァリンの姿だ。ダァリンは自分が存在していることを嫌っているから、どの人間も自分を否定して当然だと思っている。

でもそこで私が出てきた。私はダァリンを無条件で愛している。お馬鹿さんなところも卑屈なところも無様なところも乙女なところも、過去も現在も含めて承知されて愛される。疑い信じなかったダァリンはけれども、それを信じざるを得なくなってそして今、世界が根底から覆される不安におびえているのだろう。

でもまぁ、普通は厭われるだろう私の愛情を怯えながらも貪るダァリンは破れ鍋に綴蓋ってことで丁度いい。結局、そう結論付けた私は赤い耳元に囁いた。

「愛してるわ、ダァリン」

マイスイートハート（後書き）

三話にしようと思ったけれど書いている途中で面倒になってしまいました。

マイダァリンの設定を連ねたようなメモ書きで、酷い有様に。

自己中心性はピアジェの発達心理学における意味で用いています。心理の状態の比喩として用いていますが本来は幼児の認知の特徴だったような気がします。心理学は齧っただけの素人なので間違っていたら申し訳ありません。

いい加減、面白い話を作りたいです。精進いたします。

幸田さんと久賀代くん（前書き）

脳みそを使わないで書きました。
結局どういうことって文章の塊。

幸田さんと久賀代くん

煮干しのお出汁をとる下準備をしている間、私は無心になる。

晴天の日のことだ。日曜の昼過ぎだから五月の風が爽やかで心地いい。縁側にお椀とざる、新聞紙を持ち出しながら、よいしょと呟いて縁側に腰掛けた。日差しが温かくてうっかり欠伸が零れた。天気が良いのはいいことだ。お洗濯ものがよく乾くしお布団はふかふかになる。

お椀一杯の煮干しの一つ一つの頭をとって腸をとる。最後に二つに割ってざるへ移動。清水屋さんで取り寄せている長崎の煮干しはどれも大振りでつやつやしていて、頭をとるぱきんという音とともにいい匂いがする。銀色の皮と黒い内臓の欠片がぼろぼろと落ちた。膝の上に広げた新聞紙の上に頭と内臓は捨てて、また次。無心に頭を折る。内臓を掻きだす。割る。次の煮干しに取り掛かる。

———手元に影が落ちた。

顔を上げるといつの間にか帰ってきていた久賀代くんが不思議そうにこちらを覗き込んでいた。

久賀代くんは今日も完璧だった。黒いジャケットに白いゆったりとしたトップス、その襟元と裾からネイビーの色が覗く。くたびれた深緑のボトムズと大きなごっついスニーカーのネイビー。首にはシルバー。癖の強い鮮やかな金茶髪を後ろでちょこんと結んで、色とりどりの愛らしいヘアピンで前髪を止め。おとこらしく骨太に、そして甘く整った顔立ちの中の垂れた目の左側の泣きぼくろの側に皺が寄った。

昨日学校でバイバイしてから帰ってきていないはずの久賀代くんはふわりと笑う。

「なぁに、してんのー？」
流行やトレンドにはとんと疎い私だけれど、その私から見ても久賀代くんの服の完成された感じは読み取れる。久賀代くんはいつも通りさりげなく縁側に腰掛けて、興味津々といった様子で無意識に動く私の手を眺めた。煮干しの匂いを上回る、お化粧と香水の甘い華やかな女の人の匂いがする。今までこの香水の女の人と一緒にいたのかなぁとまるでドラマのような現実感のなさにどきどきわくわくする。思わず鼻をそよがせてしまった。すっぴん暦17年目の小娘としてはやっぱりこういうクールな「綺麗さ」に憧れるものだ。お化粧なんて七五三の時にさしてもらった紅くらい。
じぃっと久賀代くんからの視線。はっとして意識を質問に戻す。
「これはですね、にぼしの下ごしらえをしてます」
「煮干し？　これ煮干しっていうの？」
久賀代くんはきょとんとした表情で煮干しという単語を繰り返す。久賀代くんにとっての初の煮干しとの遭遇であるらしい。おめでたい。私はとっておきに大きくて背中が曲がった煮干しを一つ久賀代くんに差し出した。久賀代くんは目を見張ったまま、掌の煮干しを指先で摘む。10センチはあろうかという煮干しだが、さすがに男の子の手に映ると小さく見えるものだなぁと私は笑ってしまった。久賀代くんは煮干しを日に当ててすかしたりひっくり返したりと大変興味深そうな様子だ。
ふむ。手を止めて久賀代くん観察に移る。久賀代くんの如何にもといった未知との遭遇の具合がちょっと面白かった。煮干し、いたんじゃうかなぁ。多少日に当ててていたってきっと大丈夫だろう、大丈夫だといいな。
「煮干しって魚なの？　これ食べるの？」
しばらく煮干しをいじり倒した久賀代くんは興味津々と言いたげにこちらを見る。こんなに関心を持ってもらえるなんて煮干しもうれしかろう。私は一つ頷いた。
「かたくちいわしですよ。食べるときもありますが、これはおだし

にします」
　こんなに大きいと甘露煮とか佃煮とか美味しそう。
「これ食べれるの？　どうやって骨とるの？」
　大層びっくりした様子で久賀代くんが繰り返す。そして私が返答する前に、首を傾げた。
「おだしってなに？」
　あれ、お出汁って結構有名な言葉だと思っていたけれど違うんだなぁ。
「ええっと」
　私は指を折って質問を心の内で繰り返す。
「食べられますよ。煎っておやつにしたり、煮ておつまみにしたりします。あと、ほねはとらないと思います。わたしは頭からしっぽまで丸ごといただきます。おだしっていうのは、おみおつけとかおひたしとかの味つけみたいなもので……」
「おみおつけって？」
　おおっと少しフライング。
「おみおつけって言いませんか？　お味噌汁？」
「ああ、みそしる。へえ、おだしってだし汁のこと？」
　久賀代くんが納得されたようでほっと胸をなでおろします。ミッション成功！
　相変わらず不思議そうに煮干しを眺めたり、私がばらばらにしていた煮干しの欠片に顔を近づけたり、久賀代くんは興味を失っていないご様子。興味深いと思ってくれたのかなぁと少しうれしくなった。この煮干しでとるお出汁、すごくおいしいんだよー。いつも久賀代くんがお代わりするおみおつけの主演だよー。内心で話しかけると久賀代くんと目が合った。びっくり。
「じゃあほんだしとか出汁の素ってなぁに」
「え？」
　久賀代くんはやや眉間にしわを寄せて首を傾げた。私も首を傾げる。

「今までの子たち、お湯に粉のなんかいれてみそしる作ってたけど、煮干しは入ってなかったよ」
私はあまりの情報に思わず煮干しを握りしめてしまいました。
「えええ、おみおつけに粉を入れるんですか！　ちなみにわたしのばあいは煮干しは、ええっと、ゆでた？そのゆで汁だけを使うので煮干しは途中でたいじょうします」
「えー、煮干しって途中退場すんの？　食わないの？」
「お友達のおうちでは食べるところもあるらしいです。わたしは一回のどに煮干しが詰まってから遠慮していただいてます」
おおっと、話がずれてしまった。久賀代くんは「へー！」と相変わらずの関心が見受けられる。さっきから煮干しをずっと持っているところを見ると相当関心が深いのかもしれない。
私は初耳の情報に話題を強引に修正した。
「お水に粉をいれるんですか！　はじめてききました、それでおみおつけになるんですか」
「なるみたい。粉入れてー具入れてー味噌入れてーみそしる？」
「ふわあ」
未知の世界に煮干しを持つ手にも力が入る。それはぜひとも確かめてみたい。来週はぜひともその魔法の粉を買いに行こう。楽しみが出来てしまい上機嫌で私は忘れかけていた煮干しの分解作業にその情熱をぶつける。ふわりと春の風に香水の匂いが飛ばされて、再びかおる煮干しの匂い。
「ねーねー、どうして煮干し使わないのにみそしるできるのー？」
久賀代くんが見よう見まねで握っていた煮干しを分解し始めた。お洋服に煮干しのかすがついていますがいいんでしょうか。存外器用な指先で何のためらいもなく煮干しを真っ二つにした久賀代くんはお出汁のもとをざるにほうるとさらに一匹取り上げる。
「きっと魔法の粉なんですよ。私も次はその粉でおみおつけをつくります」
ぱきりほろり。ゆっくりゆっくり、私たちは煮干しを分解する。

久賀代くんは渡した新聞紙を膝の上に広げて、私は腸の黒と皮の銀が散る新聞紙に視線を置いてぽつりぽつりと言葉を交わす。
日差しがあたたかくて、甘い香水と柔らかな風に時折かおる煮干しの匂い。
さっきまでとは違って無心ではないけれど、こんな下準備もまた心地いい。
「ええー。おれ、幸田さんのみそしるの方が好きなんだけどなー。煮干しで作ってよー」
「あすの朝ごはんはこの煮干しでおみおつけ作ります」
「そうなの？　じゃあ俺今日は家にいるー。今日のごはん何ー？」
「グリーンピースごはんとアオリイカのフライとじゃがいもとしいたけのコロッケ、あしたばのあえものとキャベツとおからのサラダでしょう、そらまめの卵焼き、イチゴ」
「へー。ちゃんと決まってるんだー。ってゆうかあしたばって何？」
「葉っぱとくきを食べられるんです。くせがあるけれどおいしいですよ。ちなみに今日のこんだてはあしたのわたしのお弁当になります」
「そっかー幸田さんって弁当も作ってるんだ。俺たぶんあしたば？食べたことないわー。ねえねえ、じゃあ明日のみそしるは？」
「かぶとお揚げの予定です」
「かぶってみそしるになんの？」
「なりますよー」
あっという間に下準備は終わって、ざるには半分になって量が増えたように思える銀色の小山。柔らかな日差しを浴びてきらきらとしていていかにもきれいだと思う。下準備は色々と口を動かしながらもあっという間に終わってしまう単純作業だけれど、いつもささやかな達成感を味わえる。いつもは一人で何も考えずのんびり楽しんで行うけれど、たまにはこんなにぎやかに手を動かすのも素晴らしい。大発見だ。
洋服についたカスを庭に向けて払った後、本日の予定を変更した

らしい久賀代くんは大層楽しげにざるを新聞紙の上で振るってくれた。お椀にカスを移し、新聞紙をたたむ私を、ざるをもったまま楽しげに眺める久賀代くん。まさかこの暖かかった縁側から撤退したあと、そのまま台所まで同行し、結局夕食の支度とお出汁づくりに参加し、夕食を平らげ、翌日の朝食の席に着き、お弁当を要求されるとは、まったく予想していなかった。そんな五月のある晴れた日の午後の出来事。

幸田さんと久賀代くん（後書き）

で？っていう。結局なんなのと思われた通りの文章です。
何でもないどうしようもないストーリーすらありません。

テーマもストーリーもぶっとばして書いて結局着地点が見つからずに無様に墜落死したような状況です。見にくいし醜いですね。

「　」（前書き）

夢の話。
空白は、まだ埋められませんでした。

「　」

「――――だって！」
女は顔をぐしゃぐしゃにして叫んだ。
「お前たちに、辛い思いなんてさせられない！」
「なんでだよ……」
力なく項垂れて呻いた僕の声に、女は怒鳴り返す。
「だって可愛いんだ！」
僕は、絶句する。
女の顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃで、それでも壮絶に美しい顔を歪めて指先で自らの顔に傷をつけるように爪を立てながら喚く。
「どうして、私が可愛いお前たちに傷をつけなければいけないんだ！　こんな可愛いお前たちが苦労するなんて、そんな馬鹿げたことがあってたまるか！　幸せに幸せに、そう願って生み出したのになんでそんな現実を認めなければならないんだ！」
その場に膝をつき、美しい顔に血がにじむ。
「幸せに、ただ笑って過ごしてほしかっただけなのにっ。そんな、悲しい顔をさせて絶望させてそんな感情を味わってほしくなんてないに決まっているだろう！　どんなに頑張ってもお前たちの魂はすぐに燃え尽きてしまうのにましてやっ、そんな短い一生で涙だなんて一滴も流してほしくなんてない！　幸せに幸せにと願って、そうあってほしいだけなんだ！」
どんな偶然なんだろう、僕たちは跪き、顔を合わせる。
「私はお前たちをずっと見ている、生まれた瞬間からどのお前たちも見てきた。可愛いお前を、お前たちを見てきた。顔をぐしゃぐしゃにして泣きながらあんな小さな命で生まれてきて一生懸命生きていく。この世界はお前たちに優しくないだろう。それでも頑張ってふんばって、生きていくお前たちに、誰が、傷ついてほしいなんて

思えるんだ」
女の指がぶるぶると震えながら、僕に近づく。
「こんな、こんな馬鹿げた話があるか。どうしてお前たちが目いっぱい生きられる世界じゃないんだ。お前たちが傷つくのなんて見たくない、悲しむのなんて見たくない。辛い思いなんてしてほしくない。それだけなんだ」
ああ。
呻いた声は、僕と彼女。重なって、僕たちは掌に顔を埋めた。
「こんな　だからお前たちが苦しいのか、お前たちを傷つけるのは私か」
女の低い低い声を聴く。女は、泣いているのか。
僕は掌に落ちる涙を感じながら、ぼんやりと考えた。
———女はまぎれもなく　だった。
ああ、僕たちが　を、女を、どうしようもなく愛して、焦がれて、慕って、許してしまうその理由が、分かってしまった。

「　」（後書き）

夢で見たものをそのまま吐き出したものです。
空白に埋める言葉が自分の中では三、四候補があります。どれなのかわからないためそのまま投稿という暴挙をしてしまいました。
お粗末ですすみません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1905m/

詰め込み話

2012年1月12日20時45分発行